いきいき行田人（ぎょうだじん）

パクチーなどの珍しい野菜が大好評の新規就農者

藤本 友幸 さん（長野・32歳）

独特な香りで近年注目を集めているパクチー。エスニック料理に欠かせないこの野菜を栽培しているのが、長野にお住まいの藤本友幸さんです。

両親の母国であるベトナムで生まれた藤本さんは、小学校低学年のときに両親とともに来日し行田市内で育ちました。ベトナムでは、農業を営んでいる祖父母の手伝いをしていたことから、もともと農業に興味がありました。大学卒業後は行田を離れ、横浜の花農家で働いていましたが、3年ほど前に「育った地で農業をやりたい」と思い立ち、行田に戻ってきました。しかし、最初は借りられる農地や販路が全くなく就農当時は苦労の連続だったそうです。

そして、今では地元の先輩農家や行政機関などの協力もあり、何とか農地を借り受けることができ、インターネット（フェイスブック）上で野菜を販売するようになった藤本さん。開始当初はいろいろな野菜をインターネット上で販売し、消費者の反応を見ながら、野菜の種類や生産量を調整していました。現在は、東京、大宮、熊谷などの市場にも出荷しています。藤本さんの作る野菜はどれも人気で、中でもパクチーの売れ行きが好調だそうです。その他に、空芯菜（くうしんさい）、ラオラムなど主に東南アジアで消費される野菜をビニールハウスで育てています。

生産が軌道に乗ってきたとはいえ「栽培には手間がかかるため、効率的にやるにはどうしたらいいかを常に考えながら作業をしています」と話す藤本さんですが、「苦労して作った野菜をお客さんにおいしいと言ってもらい、リピーターになってもらえるとうれしいですね」と農家としての喜びを口にします。また、「現在はインターネットでの通信販売がメーンになっていますが、栽培量を増やして定期的に市場に出せるようになりたい。よりよい野菜を作るためにこれからも農業の先輩方の方法を勉強したいです。市内の方たちにも食べてもらえたらいいですね」と、今後の展望を語ってくれました。手塩にかけて育てた野菜が行田の飲食店や家庭の食卓に並ぶ日が来ることを目標に、藤本さんの挑戦は続きます。

私の作品

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までに、はがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

俳句

富士見町　鈴木スイ子
しばらくはひと尋（ひろ）のまま花筏

荒木　藤田　栄之
白鷺の一歩一考また一歩

荒木　手島　一海
仏生会香炉のぬくみ掌に残る

矢場　高田みつ子
天平の礎石に遊ぶ胡蝶かな

谷郷　大谷　峯生
花影といふ静けさに花袋の碑

南河原　今村　文女
苗木植う一寸先は闇なれど

忍　飯島　素子
葉桜や生きるも仕事試歩はじむ

棚田町　春田　枕流
茶摘女の解けし手拭紅の痕

持田　二瓶　弘子
さへずりを確と聞き分く卒寿かな

富士見町　森　節子
竹の子の香り占拠の厨かな

樋上　吉澤とし子
窓あけて囲む食卓若葉風

持田　丸山　麟一
アスファルト割って芽吹きし草のあり

須加　天沼　広吉
ただいまの声待ちわびる日永かな

城南　橋本千枝子
足袋蔵は日本遺産に忍の春

城西　榊原しずか
新入生鉛筆の芯まだ長く

清水町　斉藤　文子
心揺る免許返納花曇り

天満　青柳　欣吾
五月晴卒寿の植うる胡瓜かな

谷郷　吉野　六郎
四回転祝うごとくに花吹雪

中里　鯨　美智子
母子草押し花にして封に入れ

谷郷　野村　純
夕映えの水面に浮かぶ落花かな

（三沢　一水　監修）

はじめまして

★★★ 平成28年 6月生まれ のおともだち ★★★

平成28年8月生まれのお子さんを募集します

○6月1日㈭～30日㈮に電話またはEメールで広報広聴課広報広聴担当（内線318）
※応募要領は市ホームページをご覧ください。
○応募者多数の場合は、7月3日㈪午前11時から市役所203会議室で公開抽選を行います。

夏目 文（ふみ）ちゃん（桜町）
平成28年6月3日生まれ
父・知貴さん　母・悠さん
「健やかな成長を願います」

羽鳥 航平（こうへい）ちゃん（白川戸）
平成28年6月28日生まれ
父・健太さん　母・明日香さん
「我が家のわんぱく王子☆」

郷田 朔叶（さくと）ちゃん（野）
平成28年6月18日生まれ
父・尚人さん　母・奈央さん
「大きくスクスク育ってね♡」

加瀬田 都和（とわ）ちゃん（南河原）
平成28年6月20日生まれ
父・和秀さん　母・智子さん
「わが家の超わんぱくボーイ」

坂田 侑衣子（ゆいこ）ちゃん（持田）
平成28年6月13日生まれ
父・頼彦さん　母・和子さん
「元気で優しい子になってね♡」

小山内 七美（ななみ）ちゃん（佐間）
平成28年6月3日生まれ
父・美行さん　母・祐子さん
「のびのび明るく健やかに♡」

ぎょうだの会社をクローズアップ!!

株式会社イサミコーポレーション

時代のニーズを的確に捉えたものづくり

明治40年3月の創業以来、110年にわたり行田の地で足袋を作り続けている株式会社イサミコーポレーション。大正から昭和初期に建設された工場では今も絶えずミシンの音が鳴り響いています。

13工程に及ぶ足袋づくりは、熟練した技術を持つ22人の職人が各工程に分かれ一つ一つ手作業で行っています。代表取締役社長の鈴木健二さんは「製造工程の中でも〝つま縫い〟と〝仕上げ〟の工程が足袋の履き心地を左右します。私たちの会社ではつま縫いを県の伝統工芸士に認められた職人が担当しています。また変化し続ける足の形に合わせて足袋の型も改良を続け、常に履き心地の良さを追求してきました」と説明します。

さらに、足袋の需要落ち込みを受け、昭和5年に始めたのが学校制服の製造。デザインから縫製まで一貫して携わり、埼玉県を中心に関東圏内の高校、中学などに制服を提供しています。同社の制服は、3年間の着用に耐えられるよう上質な生地としっかりとした縫製で丈夫に作られているだけでなく、成長に合わせて袖口が伸ばせるようになっていたり、手入れがしやすいよう家庭での水洗いが可能であったりと細かな配慮が行き届いているのが特徴です。正確な採寸と職人の確かな技術で、体型に合わせたサイズに仕立てています。さらに学校制服の製造で培った経験を生かし、その後学校向け体育着、企業用ユニフォーム製造へと事業を拡大してきました。

時代のニーズを的確に捉え事業を展開するなかで、履き心地・着心地の良い製品を世に送り出してきた同社。鈴木さんは「これからも新たな事業に挑戦しながら、使命感をもって行田の足袋産業を支えていきたいです」と決意を語ります。最近では地元足袋業者や市民活動団体とも連携し、足袋文化のPRにも力を入れているとのこと。今後も伝統を守りながら進化を続ける同社のものづくりが注目されます。

会社プロフィール

代表取締役社長　鈴木　健二
【事業内容】学校制服、体育衣料、企業ユニフォーム、足袋の企画・製作・販売
【住所】向町2―6

※このコーナーで紹介する会社を募集しています。
特色ある業務を行っている会社の情報を広報広聴課広報広聴担当（内線318）までお寄せください。